

## 第2節 主要な人名と政党名

### 1. 主要な人名

#### アドゥラ、シリル (Adoula, Cyrille)

1921年レオポルドヴィル生まれ。赤道州出身。ブジャ人。中程度の教育を受け、中央銀行などに勤務。1955年、ベルギー社会主義労働組合運動のベルギー労働総同盟コンゴ支部に参加、最後に事務局長となる。58年10月、MNC結成時に副党首となったが、59年7月の党の分裂時にルムンバと袂を分かち。60年5月、赤道州選出の上院議員となる。同年9月にモブツがクーデタを起こし、委員会内閣を設立した際には、陸軍の政権掌握に反対し、内閣への参加を拒んだ。61年2月、イレオ政府の内相となり、その地位を利用して不法拘留者を釈放、政治犯虐殺の阻止に努める。同年6-7月にはスタンレーヴィル政権との折衝に指導的役割を演じ、8月に成立した連合政府の首相に就任。(C, p.401)

「開化民(évolué)」であり、1954年には社会主義同友会(Amicale socialiste)に参加。1964年6月、国連軍撤退の数日前、カザヴブはアドゥラを解任し、チョンベを首相に任命。その後2年間亡命生活を送るが、モブツのクーデタの後にコンゴに戻り、ブリュッセルやワシントンへ大使として派遣される。1969年8月には外相となるが、短時間で更迭される。数年後に病死。(B, pp.13-14)

#### チェ・ゲバラ、エルネスト (Guevara, Ernesto Che)

1928~67年。アルゼンチン生まれの革命家。1956年以降キューバ革命に参加し、59年に革命が成功した後は国立銀行総裁や工業相を務める。65年4月にタンザニア経由でコンゴ東部に潜入し、カビラなどの反政府勢力を支援したが、目立った成果を上げることなく同年11月に撤退した。

#### グベニエ、クリストフ (Gbenye, Christophe)

1927年生まれ。東部州バウエレ地区出身。ブア人。スタンレーヴィル政庁に勤務し、ルムンバ側近の一人となる。MNCの組織化のため熱心に努力した。1960年5月の選挙で下院議員に選出され、ルムンバ内閣の内相となる。9月、ルムンバとともに追放され、スタンレーヴィルに脱出。ギゼンガ政権の内相となる。ロバニウム会議ではギゼンガ政府を代表して折衝し、アドゥラ政権の内相となる。ギゼンガが逮捕されたときも内相であったが、次第にアドゥラと見解を異にするようになる。(C, p.401)

アドゥラ政権で内相であったとき、ネンダカを解任して諜報部を掌握しようとしたため、これと対立関係になる。ネンダカはモブツに助けを求め、モブツは内務省に部隊を派遣してこれを包囲し、諜報部を内務省から分離させる。この一件もあって、グベニエはアドゥラ内閣から距離を置くようになり、1963年にはブラザヴィルでCNLを設立するに至る。(K, p.136)

1964年、短期間存在したコンゴ人民共和国大統領を務める。スタンレーヴィルに200名の欧米人を人質に取るが、同年11月24日に米、ベルギーなどの軍事介入により制圧される。その後グベニエはウガンダやヨーロッパを逃亡するが、83年に恩赦され、84年に帰国。(B, pp.90-91)

### **ギゼンガ、アントワンヌ (Gizenga, Antoine)**

1925年生まれ。レオポルドヴィル州クウィル地区グング近郊出身。ペンデ人。ローマ・カトリック神学校にて比較的高い水準の教育を受けたが、聖職者を嫌い、教員となる。PSA党創設者の一人で、初代党首。60年初頭、東西ヨーロッパを歴訪。5月の選挙で代議院議員に選出され、ルムンバ政府の副総理に任命される。9月の危機には、ルムンバに忠誠を誓い、スタンレーヴィルに脱出。委員会内閣に対抗するルムンバ派の体制を確立。61年8月、連合政府の結成に同意し、同年9月副総理に再任される。10月にスタンレーヴィルに戻るが、62年1月中央政府により逮捕拘禁される。(C, p.401-402)

1964年にチョンベが首相になると釈放されたが、自宅軟禁に置かれ、モブツのクーデタまでその状態が続く。1970年代初頭には亡命してコンゴ解放民主勢力 (Forces démocratiques pour la libération du Congo: Fodelico) を結成。1977年、モブツはギゼンガに対し、コンゴに帰国して選挙で戦うよう求めたが、ギゼンガは拒否した。(B, p.93)

### **カビラ、ローラン・デジレ (Kabila, Laurent-Désiré)**

1939年カタンガ北部マノノ生まれ。東ドイツに留学後、1960年バルバカ党から議員に選出される。ルムンバ失脚後はスタンレーヴィルのギゼンガ政権に加わる。後にギゼンガと不仲になり、64年以降は自ら人民革命党 (Parti de la Révolution Populaire: PRP) を設立し、東部で武装闘争を開始。70年代から80年代にかけ、外国人の誘拐や襲撃事件を引き起こす。96年、反政府武装勢力ADFL (コンゴ・ザイール解放民主勢力連合) のスポークスマン、後に議長となる。97年、内戦に勝利して、新生コンゴの大統領に就任。2001年1月側近に射殺される。

### **カミタツ、クレオファス (Kamitatu, Cléophas / Kamitatu Massamba)**

1931年生まれ。レオポルドヴィル州クウィル地区マシ・マニンバ地方出身。ンバラ (ンゴンゴ) 人。イエズス教団の教育を受け、53年に行政府に就職。ギゼンガが党首だったPSA党の州委員長を経て、60年6月にレオポルドヴィル州政府長官に選出される。同年9月にはルムンバとカザヴブの妥協を唱え、モブツの政権掌握に反対した。スタンレーヴィル政権に同情的であったが、60~61年にはレオポルドヴィルに留まり、61年8月のアドゥラ内閣成立のための交渉に重要な役割を果たす。同年末には、ギゼンガよりもアドゥラ支持を打ち出したため、PSA党は激しく敵対する二派に分裂した。(C, pp.402-403)

1962-64年、アドゥラ政権下で内相や計画・開発相を歴任。モブツのクーデタで打

倒されたキンバ内閣では外相だった。モブツのクーデタ後は亡命し、アフリカ社会主義戦線 (Front Socialiste Africain: FSA) を設立。後にモブツの恩赦を受けて帰国し、77年には国会議員選挙に出馬するも落選。しかし、80年代には農相を務め、党中央委員になった。(B, pp.110-111)

### **カザヴブ、ジョゼフ (Kasavubu, Joseph)**

1917年、マヨンベのチェラ (Tshela) に近いクマ・ディジ (Kuma-Dizi) に生まれる。コンゴ (Kongo) 人。キズ (Kizu) のカトリック伝道団で教育を受け、ブリュッセルの植物技術学院で農業を学ぶ。1946年以降、政党設立禁止令を避けてつくられたグループ (Interêt Sociaux Conglais: コンゴ社会利益) のメンバーとなる。1950年、後にアバコとなるバコンゴ協会 (Association des Bakongo) に加入。54年に会長となる。植民地政府によって最初に実施された57年の地方選挙では、レオポルドヴィルのダンダル (Dendale) 地区長に選出される。59年1月のレオポルドヴィル暴動の後に投獄されるが、2ヶ月後に釈放。60年の選挙でアバコは勝利するが過半数にはいならず、MNC と協議の末大統領に選出される。60年9月には、首相のルムンバと相互に解任しあって政治的手詰まり状態に陥り、モブツのクーデタを招く。その後、モブツおよび西側諸国に接近し、大統領の地位を守る。65年、チョンベ首相の解任によって、またも政治的手詰まり状態を生み出し、再度モブツのクーデタを招いた。その後は、69年に死去するまで、バコンゴで隠遁生活を送った。(C, p.403 など)

### **カシャムラ、アニセ (Kashamura, Anicet)**

1928年生まれ。カレヘ (キヴ) 出身。ジャーナリズムを学び、設立に参加したキヴ州のCerea党機関誌「ヴェリテ (Vérité)」編集者となる。円卓会議では行政院担当に選ばれる。60年5月、ブカヴから下院議員に選出され、ルムンバ政府の情報相となる。暴動の間、激しい反ベルギー宣伝放送を担当した。60年8月段階ではルムンバに最も近い政治家の一人だった。60年9月、ルムンバとともに失脚。スタンレーヴィルに脱出した。(C, p.403-404)

### **ルムンバ、パトリス (Lumumba, Patrice)**

1925年生まれ。カサイ州サンクル地区出身。テテラ人。スタンレーヴィルで教育を受け、のちスタンレーヴィルの郵便局事務員となる。56年、横領罪で2年間の実刑 (のちに減刑) を言い渡される。57年レオポルドヴィルに移り、ビール会社の販売支配人となる。58年10月、MNC結成を指導し、同年12月、アクラにおける第1回パン・アフリカ人民会議に出席。59年末、煽動罪で逮捕されたが、円卓会議出席のために釈放された。60年6月に首相となり、その直後兵士の暴動と行政府の崩壊に直面。同年9月カザヴブに解任され、12月まで国連軍保護の下にレオポルドヴィルに留まっていたが、スタンレーヴィルに

向け逃亡しようとしたところを逮捕される。61年1月身柄をカタンガに移され、殺害された。(C, p.404)

### **モブツ、ジョゼフ＝デジレ (Mobutu, Joseph-Désiré / Mobutu Sese Seko)**

1930年生まれ。赤道州リサラ生まれ。ンバンディ人。50～56年、公安軍書記として勤務。その後、文筆活動とともに政治活動を行い、MNCのメンバーとなる。59～60年、ジャーナリズムの研修を受けるためブリュッセルに滞在。この時、ベルギー公安に対し情報提供を行う。60年の5月選挙には立候補しなかったが、ルムンバ政府では国務大臣 (Secrétaire d'Etat) に任命され、暴動後陸軍参謀長に任命される。60年9月、クーデタを起こし、委員会内閣を任命(C, pp.404-405 など)。

65年11月24日に再度クーデタを起こし、5年間非常事態下で政権を担当すると表明。66年に自分の政党であるMPRを創設。(B, pp.149-150)

1997年5月、カビラ率いる反政府勢力の攻撃を受けて逃亡、失脚。同年9月、前立腺ガンのために亡命先のモロッコで客死。

### **ムレレ、ピエール (Mulele, Pierre)**

1964年のクウィル反乱を指導。コンゴに初めて都市ゲリラ・テロ戦術を持ち込む。独立時にはPSA党の指導者。ルムンバ内閣で教育大臣を務める。ルムンバの死とともに国を離れ、中国で軍事訓練を受ける。農村革命の毛沢東思想を学び、1963年に帰国すると反政府活動を開始する。行政組織、伝道団組織を破壊し、数ヶ月に渡りクウィルやレオポルドヴィルでテロ活動を行う。65年に反乱が鎮圧された後、ブラザヴィルに亡命し、そこをベースに活動を継続したとされる。恩赦を与えるとのモブツの申し出に従って帰国したが、逮捕され、68年10月8日に処刑された。(B, p.155)

ムレレもモブツと同様、植民地公安軍の出身であり、クウィル中学校卒業後、1951年に公安軍に入った。暴動鎮圧と村落蜂起に対する軍事行動理論を学び、ベルギー人上官の目にとまってレオポルドヴィルに送られる。伍長(corporal)の地位で公安軍から除隊(モブツは当時の最高位である上級曹長: Sergeant majorの地位まで昇進した)(K, pp.93-94)

ムレレはンブンダ人であった。クウィルの主要な政治家について言えば、カミタツはンゴンゴ人だがンバラ人と一般には認識され、ギゼンガはペンデ人であった。ムレレによる反乱勃発当時のクウィル州知事はレタ(Norbert Leta)というペンデ人であったが、ペンデとンブンダというクウィルの有力エスニック集団からは、州政府はンバラ人に支配されていると感じられていた。逆に、それ以外のエスニック集団からは、クウィルの反乱はペンデとンブンダの連合によるものだと見られていた。(Y, p.221)

1964年反乱指導者の多くは革命のレトリックを弄ぶだけだったが、ムレレは其中でおそらく最もイデオロギー的であった。1960年当時、ムレレはあまり目立たなかった。選挙において、同じPSAから立候補したカミタツが6万511票、ギゼンガが5万445票を

獲得したのに対し、彼の得票は 5520 票に過ぎず、党内第 9 位だった。ギゼンガとともにスタンレーヴィルに逃亡するが、60 年 12 月にはギゼンガに失望し、大使としてカイロに駐在し、ガーナのンクルマに支持を求めた。ンクルマによれば、ムレレはカイロの中国大使館と密接な関係を持ち、62 年にプラハ、モスクワ経由で北京に到着。そこでゲリラ戦争の訓練を受けた。(Y, p.228)

#### **ムノンゴ、ゴドゥフロワ(Munongo, Godefroid / Munongo, Mwenda M'Siri Shyombeka)**

1925 年生まれ。ブンケヤ(カタンガ州)出身。イエケ人の長の家族に生まれ、長の弟にあたる。また 1891 年にベルギー人によって殺されたイエケの長ムシリの孫にあたる。ブンケヤとエリザヴェトヴィルで教育を受け、レオポルドヴィル近郊キサントウの行政学校に学ぶ。コナカ党の創設メンバーであり、1958 年に初代党首となる。しかし、レオポルドヴィル州のインガ水力発電計画の管理職に転任を命ぜられ、党首を退く。60 年 5 月選挙でカタンガ議会議員に選出され、カタンガ州政府の内相となる。(C, p.405)

チョンベの首相就任に伴い、内相を務めるが、1964 年 6 月 9 日の内閣改造で更迭。66 年 12 月 26 日の一斉逮捕で拘禁され、刑務所に数年入れられた後、自宅軟禁に置かれた。(B, p.156)

#### **オレンガ、ニコラス(Olenga, Nicholas)**

スミアロ軍の指揮官。1964 年 8 月のスタンレーヴィル攻略作戦を指揮。スミアロと同様、キンドゥ近くで生まれ育った。独立前は東部コンゴで事務員として働く。スミアロがブカヴで州法務大臣を務めたときに結びつきを強めたとされる。キンドゥの MNC 青年部を組織。軍事的な経験は全くなかった。(K, p.117)

出身部族はテテラ・クス。これは 1964 年 6 月頃フィジに成立した APL を率いたカリシベ(Jean-Bosco Kalisibe)やチョンバズ(Victor Tshombaz)などの主要指導者と同じである。(Y, p.232)

#### **ルケバ、フランソワ(François Rukeba)**

コンゴ人の父とルワンダ人(フトゥ)の母との間に生まれる。チャンググ近くでサブチーフを務めたが、1944 年に公文書を偽造した罪で役職を解かれる。47 年には国外追放令が出されたが、これに対してルケバは翌年国連の監視団に提訴した。ルワンダ王のムシンガがベルギーによって王位を剥奪(31 年)された後、ルケバが親しく接したといわれる。王党派政党の UNAR が 59 年 8 月 15 日に設立された際、議長に就任。(L, p.158)

1959 年 11 月にルワンダで「社会革命」が勃発した後、UNAR 幹部の多くは周辺国に亡命する。ルケバは UNAR 亡命政権においても主導的地位にあったが、侵攻の失敗などにより組織は次第に力を失った。

### **センドウェ、ジェイソン (Sendwe, Jason)**

1917 年生まれ。カタンガ北部カボンゴ出身。カタンガ・ルバ人。プロテスタント伝道団で教育を受け、補助医師となる。バルバカ党首として、59 年 11 月のコナカ党からの脱退を指揮。円卓会議ではバルバカ党を代表。60 年 5 月選挙では、エリザヴェトヴィルから下院議員に選出される。コンゴ危機の間はレオポルドヴィルに留まり、イレオ、ギゼンガ両政権のいずれにも参加しなかった。61 年 8 月成立のアドゥラ政権の副総理に就任。(C, p.405)

### **スミアロ、ガストン (Soumialot, Gaston)**

東部コンゴ出身。独立前からルムンバの協力者で、MNC の組織に努力。ルムンバ政権時代は、キンドゥの州政府高官に任命される。1961 年、短期間だが、ブカヴで州政府法務大臣を務める。63 年 9 月末の議会解散後にマサンバ＝デバ政権下のブラザヴィルに渡り、10 月 3 日に結成された CNL の指導者となる。おそらくは中国共産党の指示を受けて 64 年 1 月 (Y, p.211 では 2 月) にブジュンブラに派遣され、そこで CNL の支部を開設した。当時中国はブジュンブラに大使館を開設したばかりだった。ブジュンブラでは中国人と行動をとる。背が低く、あごひげを生やし、しばしば豹の皮を身に纏い、象牙の柄の杖を持つという目立った風体だったために、西側外交官にも中国大使館との繋がりを目撃される。64 年 2 月までにはブジュンブラのコンゴ大使館もスミアロをマークし、レオポルドヴィルにスミアロが東部コンゴに騒乱を画策し、ウヴィラの ANC 兵舎に出入りしていると連絡。コンゴ大使館はブルンディ政府に抗議したが、ブルンディからはスミアロは政治難民だとの回答を得る。スミアロは、ウヴィラとブカヴで、カザヴブとアドゥラを攻撃するパンフレットを配布。ブカヴで騒乱を引き起こし、64 年 5 月にはウヴィラを制圧。事務所をウヴィラに開設。(K, pp.97-98)

父親はソンギエ(Songye)人であったが、スミアロ自身はクス人だと見なされた。スミアロの活動は、マニエマ、南キヴ、そしてカタンガ北部で強い支持を得た反面、スタンレーヴィルに住んだことがなかったために、そこでの人気はグベニエにはるかに及ばなかった。(Y, p.232)

### **チョンベ、モイゼ (Tshombe, Moise Kapenda)**

1917 年生まれ。カタンガ州カパンガ近郊出身。ルンダ人。裕福な商人の子として生まれ、ルンダの長ムワタ・ヤムボの娘と結婚。中等学校を終えた後、教師や実業家として活躍。58 年にムノンゴの後を継いでコナカ党首となる。60 年 5 月カタンガ議会議員に選出され、カタンガ州政府の大統領となる。独立直後の暴動発生時にカタンガの独立を宣言し、大統領に選出される。(C, p.405)

1963 年 2 月に分離独立が終結するとスペインに亡命した。しかし、チョンベは傭兵やカタンガ憲兵隊に対して強い動員力を持っていたため、東部やクウィルの反乱に直面し

たカザヴブが64年6月に首相に任命した。チョンベはすぐに帰国し、CONACOを基盤として組閣する。ルムンバ派が制圧したスタンレーヴィルを、傭兵やカタンガ憲兵隊を使って攻撃。アメリカとベルギーの軍事介入もあって、スタンレーヴィル奪還に成功した。カザヴブはしかしチョンベを65年10月13日に解任し、キンバ(Evariste Kimba)を首相に任命。モブツのクーデタを招く。67年3月13日、反逆罪により、本人不在の法廷で死刑判決を受ける。67年6月30日、亡命先で誘拐され、アルジェリアで軟禁される。69年6月30日、アルジェリア政府が心臓発作で死亡と発表。(B, p.215)

### ファンデワレ、フレデリック (Vandewalle, Frédéric)

ベルギー人。コンゴ独立時までコンゴの諜報部責任者。モブツなど数名のコンゴ人をベルギー諜報部への情報提供者として使う。独立直後は諜報部責任者に留まったが、1960年7月にはベルギーに帰国。6ヶ月後、エリザヴェトヴィルのベルギー総領事館付きに任命され、カタンガに戻る。役割は、チョンベの「秘密顧問」であった。同時に、エリザヴェトヴィルに対するベルギーの軍事支援流入を監督。61年1月にルムンバラがカタンガへ移送された際、空港で迎えたとされる。63年のカタンガ分離独立終結に伴ってベルギーに帰国。64年にチョンベ政権が成立すると、再び軍事顧問としてコンゴに戻る。同年8月28日、チョンベにより反乱軍制圧地域に対する全作戦調整官に任命された。(K, p.120)

## 2. 政党名

### Abako (Alliance des Bakongo: アバコ党)

1950年にコンゴ(Kongo)人の社交文化団体として創設された。党標はカタツムリ。54年にカザヴブが指導者に就任。コンゴ(ブラザヴィル)、コンゴ(キンシャサ)、アンゴラの3カ国にわたるかつてのコンゴ王国の領域を再統合し、王国を再建することが当時の目標だった。57年12月に大都市で自治体議会の選挙が行われた際、アバコ党はレオポルドヴィルで完勝。デンシル地区の区長に選出されたカザヴブは、就任式でベルギーによる統治を攻撃し、総選挙と自治を要求した。58年11月には独立とベルギー人の退去を要求。カザヴブは、同年12月のアクラにおける第1回前アフリカ人民会議に招聘されたが、ベルギー当局により出席を拒絶された。

1959年1月4日のレオポルドヴィル暴動で非合法化され、カザヴブを含め幹部の多くが投獄されるか、地元で追放された。しかし、アバコ党はこれを利用して農村部の組織固めを行い、活動資金を農村から調達した。この時点でアバコ党は、60年1月1日にバコング地方のみを自治、独立させることを要求していた。レオポルドヴィルに強力な支部を持つアフリカ連帯党(PSA)と連携を工作。59年10月には市民的不服従運動を組織。円卓会議開催に圧力をかけた。この頃から、分離主義から連邦主義へと主張を転換。12月にキサントゥで行われた会議では、PSAなどと政治同盟の結成を決めた。

アバコ党は本質的に「部族政党」で、他のコンゴ人政治家やパン・アフリカニストとは接触しなかったが、仏領コンゴのユールー (Foulbert Youlou) とは密接に連携していた。(C, pp.18-21)

#### **ARP (Alliance rurale progressiste: 進歩派農村同盟)**

1959年7月キヴ州で設立。当初はURP (Union Progressiste Rurale) と称した。1960年3月にバギラ (Bagira) で開かれた会議で、ARPは、アワビロ党 (Awabilo)、マニエマ連帯運動 (Mouvement Solidaire du Maniema)、キヴ市民運動党 (Parti d'Action Civique du Kivu)、ベニ・ルビロ地域伝統首長党 (Parti des Chefs Coutumiers des Régions de Beni et de Lubiro) などキヴ州の諸政党とともに、PNPと選挙協力を行うことを決めた。(A, p.116)

#### **Balubakat (Association des Baluba du Katanga: バルバカ党)**

植民地期にカサイ州からカタンガ州に移住してきたルバ人の統一促進を目的として、1957年にセンドウェによって創設された。57年12月にエリザヴェトヴィルとジャドヴィルで自治体選挙が行われた際には組織力を発揮し、エリザヴェトヴィルでは4つの区長ポストのうち3つをルバ人が占めた。59年2月には、自身は大幅な自治権を保持するとの条件でコナカ党に合流したが、11月に脱退。フェデカ党およびアンゴラ・ローデシア地方コンゴ・チョクエ連合 (Atcar) と結んで、反コナカ党カルテルを結成した。(C, p.21)

#### **Cerea (Centre de regroupement africain: アフリカ人結集センター)**

1958年8月ブカヴで設立。キヴ地域で勢力を拡張。円卓会議後、指導者間の対立から、ジャン・ミルホ派 (北部キヴ地方)、アニセ・カシャムラ派 (ブカヴおよび南部キヴ地方)、それにクリストフ・ウェレゲメレ派 (ウヴィラ地方) の3つに分裂した (C, p.53)。

#### **Conaco (Confédération national des associations congolais: コナコ党)**

1964年のチョンベの帰国時に彼を支えた南部の政党連合。Conakat、Balubakat、MNCカロンジ派、そして若干のアドゥラ支持派などが結集した。この政党を支持基盤として、チョンベ首相、ムノゴ内相、カロンジ農相などが選出された。65年3月の選挙では、167議席中122議席を獲得して大勝したが、その後カザヴブはチョンベを首相から解任して、バルバカ党のキンバを首相に指名。政治的混乱を導いた。(B, p.51)

#### **Conakat (Confédération des associations du Katanga: コナカ党)**

1957年12月のカタンガ州における自治体選挙でバルバカ党が強力な組織力を発揮したことに危機感を募らせたカタンガ出身者が、58年10月に結成。事実上、ルバ人を除いたカタンガ州居住エスニック集団の連合組織で、その主導権はルンダ人が握っていた。59年2月には、大幅な自治権を保持するとの条件でバルバカ党が合流した。しかしコナカ党



の意図は、カタンガ州を地元とするエスニック集団間の連帯を強め、ルバ人を中心としたカサイ州からの移民による州の行政や経済への進出を阻止することにあった。こうしたコナカ党内の反ルバ人傾向のため、58年9月のカロンジ(Isaac Kalonji)によるカサイ出身部族協会連合(Fédération des Associations Tribales des Originaires du Kasai: Fédéka)創設を契機として、ルバ人やチョクエ人のグループが離脱する。バルバカ党の指導者たちは11月にコナカ党を脱退し、カサイ出身部族協会連合およびチョクエ連合(Association des Tshokwe: Atcar)と結んで、反コナカ党カルテルを結成した。

コナカ党が主導する「カタンガ州ナショナリズム」は、ヨーロッパ人の移民や企業家の利益と一致したため、コナカ党はヨーロッパ側の団体との連携を強め、59年にはカタンガ州の自治権やベルギーとの緊密な繋がりを主張し始めた。党の綱領では、ベルギー・コンゴ共同体という形で、ベルギーとコンゴの各地方との連邦制導入が主張された。

コナカ党の初代党首はムノンゴ、2代目はチョンベであった。コナカ党の基盤は、イエケ、ルンダなどのエスニック集団やその長、企業家、ヨーロッパ人であった。また、ベルギー社会党と関係が深かった他、エスニックな関係を理由として、隣国北ローデシアの統一民族独立党(United National Independent Party: UNIP)とも密接に連携していた。(C, pp.21-22)

### **MNC (Mouvement national congolais : コンゴ国民運動)**

1958年10月、レオポルドヴィルで、様々な地方出身の教育ある若手コンゴ人によって結成。党首はルムンバ、副党首はアドゥラ、中央委員にはイレオ、ンガルラ(Joseph Ngalula: ルバ人)、ディオミ(Gaston Diomi: コンゴ(Kongo)人)、ングヴル(Alphonse Nguvulu: コンゴ(Kongo)人)などがいた。当初、非暴力による独立達成、教育の推進、あらゆる地方主義や分離主義への反対を唱え、ベルギー人官吏から良い評判を得た。そのため、ルムンバやディオミ、ンガルラは、58年12月のパン・アフリカ人民会議に出席できた。この会議でルムンバは、パン・アフリカ人民会議運営委員会コンゴ代表に選出され、広い範囲のアフリカ人政治家と接触を深めた。59年1月4日のレオポルドヴィル暴動の後、アバコ党は当局から非合法化されたが、MNCには何の措置も取られなかった。

1959年の初め、ルムンバはギニアやナイジェリアを訪問してアフリカ人政治家と接触を深め、また国内各所を遊説してMNCの組織拡大に努めた。特にスタンレーヴィルとカサイ州で成功が著しかった。しかし、カサイ州の州支部議長となったルバ人実業家アルベール・カロンジは、州支部勢力をルバ人中心に変えようとしたことから、カサイ州の他のエスニック集団、とりわけルルア人との間の緊張関係を激化させた。カロンジは、イレオと組んでMNCカロンジ派と呼ばれる分派を組織し、この分派内ではルバ人の影響力が強まった。彼らは連邦主義を唱えてアバコ党とPSAが結成した政治同盟に参加した。また、ルバ人とルルア人との緊張関係は、59年10月には両者間の暴力的な衝突へと発展した。この分裂によって、アドゥラやンガルラがルムンバから離れ、ルムンバはモブツやネンダカと

接近することとなった。

1959 年後半からルムンバの政治的主張は過激化し、10 月末にスタンレーヴィルで開かれた大会では、コンゴの即時解放とベルギー支配からの脱却が要求された。10 月 30 日にルムンバへの逮捕状が出され、20 人のアフリカ人が殺害されるという暴動の後、11 月 1 日に彼は逮捕された。この投獄は彼の名声を高め、MNC の勢力はさらに伸張し、Cerea と同盟を結成した。(C, pp.22-25)

なお、MNC/L は、MNC ルムンバ派の略称。

### **PNP (Parti national du progrès: 国民進歩党)**

1959 年 11 月、当局の暗黙の承認下に、穏健中立派の弱小エスニック集団や地方政党の代表者がコキラトヴィルに集まって結成。単一国家、「部族長」への尊敬、ベルギーとの協調を打ち出す。同年 12 月の自治体議会および地方議会の選挙では、他政党がボイコットしたこともあって、多くの議席を獲得した。(C, pp.25-26)

1960 年 3 月に行われたカサイ州伝統首長会議においては、PNP への加入が勧告され、MNC カロンジ派への加入を主張した 2 人の伝統首長を除いて、伝統首長の PNP 加入が進んだ。また、同年 5 月の選挙に向けて、キヴ州においては、ARP や小規模な諸政党と PNP との間に協力関係が結ばれた。(A, pp.124-125)

### **PSA (Parti solidaire africain: アフリカ連帯党)**

党首はギゼンガ、地方議長はカミタツ。レオポルドヴィルに強力な支部を持ち、アバコと連携した。(C, pp.19-20)

左派的な傾向を有し、円卓会議に代表を送る。1960 年 9 月のモブツのクーデタ後は、ルムンバ政権に加わった閣僚の多くがスタンレーヴィルへ向かった。61 年 8 月のアドゥラ政権に加わり、ギゼンガ、カミタツとともに重要なポストを占める。チョンベ政権が成立すると幹部の多くは亡命した。ムレレは一時期、PSA の事務局長を務めた。(B, p.170)